



触ラボ -PART3-

今日は野外調査の日だ。噂によれば、
こうして無防備な状態で寝ていると
その生物は姿を現すらしい。



音もなく忍び寄ってきたのは寄生バエだった。



この種の一番の特徴は、乳管内に卵を産み付けるところだ。

寄生バエの産卵管が乳管に挿入される。



産卵は間もなく始まるだろう。

数十個もの卵が乳管内になだれ込む。



痛みはなく、鋭い快感が
乳頭から脳髄へ伝わってきた。

寄生バエの卵は数分も経たないうちに孵化する。

ズ
ー
シュ

んっ



その後、刺激を受けた乳腺から
溢れ出る母乳をすすり成長する。

孵化した幼虫は急成長し、乳首から
直接母乳を吸い出し始めた。

ちゅっ
ちゅっ

はぁ♡

はぁ♡

しゅる

この状態になってしまうと、
たとえ目を覚ましていたとしても
抵抗するのは難しい。



乳管内の寄生虫を取り除かなければ。

岩陰に潜んでいたヒモムシに
胸を近づけると、母乳の匂いに
誘われてヒモムシが飛び出してきた。



はぁ♡
はぁ♡

ヒモムシはすぐに乳首に吸い付いた。

このまま母乳を吸わせてやれば、
寄生虫を除去できるだろう。





母乳と寄生虫で膨れ上がっていた胸は
勢いよく甘美の液体を吐き出した。

はぁ♡

はぁ♡

だが寄生虫はまだ乳管内に
残っている。





こちらの意図を汲み取ったのか、
再びヒモムシたちが乳首に吸い付いた。

ちゅぽ♡

ぐっ♡

ちゅぽ♡

感度の上がった乳首から伝わる
強い快感に思考を奪われる。





寄生虫の除去には
成功した。

じゅるる♡

はぁ♡

はぁ♡

ちゅるる♡
ちゅるる♡

だがこのヒモムシたちを
満足させるまではしばらく
動けないだろう。

洞窟内で道に迷ってしまった。ふらふらと出口を探していると、すねの辺りに鋭い痛みが走った。

その直後、下半身の感覚を失い、その場に倒れてしまった
これは神経毒だ。足元にはイツギンチャクに似た生物がいた。





長く伸びた触手が外陰部を押し広げ、人間の体の最も脆弱で最も敏感な部分を露わにする。

ぐにっ♡

初めて目にする生物だったが、本能的にわかった。この生物はこれから私を凌辱するのだ。

先端部分に開口部のある細長い触手が
陰核を強く吸い上げる。





今度は、おそらくは生殖器である部位を
露わにし、こちらに見せつけてきた。

ぷりっ♡

これから私を弄び、凌辱するという
意思表示だろう。



太く弾力のある生殖器が膣内の奥深くに
挿入される。

んぐっ♡

ずいっ♡

リング状の“ひだ”が何度も膣壁に引っかかり、その度に
感じられる強烈な快感に私は身をよじらせた。

生殖器のピストン運動はどんどん激しくなった。







その生物が白濁液を吐き出すとともに、
私も絶頂を迎えた。

はぁ♡

はぁ♡

ドロォ♡

下半身はまだ動かない。私がこの状況から
脱出できるようになるまでこの凌辱行為は
続くだろう。

An anime-style illustration of a young woman with short blue hair and large, prominent breasts. She is lying on her back in a swampy, green environment, surrounded by many leeches. She has a slightly annoyed or determined expression. The text is overlaid on the right side of the image.

獲物を待ち伏せする
生物は擬態を好む。

しかし、沼地一帯が吸液ヒルの群れ
である例は極めて珍しいと言えるだろう。



2匹のヒルが乳首の位置まで
這い上がってきた。

ぐにっ♡

ぐにゅ♡

どうやらこのヒルたちの
好物は母乳のようだ。



乳管に何か細長い
器官が挿入される。

その直後、ヒルの体液の一部が
乳首の先から注ぎ込まれるのを感じた。

乳首がじんと熱くなり、
母乳が溢れだす。

はめ♡

はあ♡

とろ♡

ど♡



下準備を終えたヒルたちは
大きく口を開いた。





乳首に吸い付いたヒルたちが同時に母乳を飲み始める。

んっ♡

ちゅ。♡
(3)

ちゅ。♡
(3)

乳首の感度は極限まで高まっていた。
ヒルたちが母乳を吸い出す度に私は大きく身をよじらせた。



私の抵抗の意志に反して、
どくどくと母乳が溢れ出る。

んぐっ♡

ぢゅっ♡
ぢゅっ♡
ぢゅっ♡

ぢゅっ♡
ぢゅっ♡
ぢゅっ♡

しかし、ヒルたちはそれでも足りないと言わんばかりにさらに強く2つの乳首をしゃぶり始めた。



腹を空かせた他のヒルたちも
集まってきた。

はめ♡

はあ♡

ごく♡

ごく♡

ごく♡

ごく♡

私にはもう抵抗する気力は残っていない。ヒルたちの
思うままに乳首を凌辱され、最後の一滴まで母乳が
搾り出されるのをただ待つだけだ。



ヒルの群れから私を
助け出してくれたのは
サキュバスたちだった。

私が無事に帰還するのを
手伝ってくれるそうさ。

だがどうやら、私はその対価を
支払わなくてはならないらしい。



彼女らにとある液体を
飲むよう促された。

体の変化を見て、その液体が
何だったのかすぐにわかった。

むくっ
♡

これはふたなり化の秘薬だ。



彼女らが最初に取り出したのは
数匹の小さなミミズだった。

ミミズは陰茎の上を這いまわり、
敏感な部分を愛撫してきた。



1匹のミミズが尿管に
侵入してきた。

不思議と痛みはなく、ミミズが尿管内で
体をくねらせるたびに強い快感が私を襲った。



遅れて姿を現したのは
彼女らのペットだった。

このペットの給餌を終えることが私を
解放する条件だと彼女らに伝えられた。



ペットの大きな舌が陰茎を
べろりと舐め上げる。

れろお
❤



ペットが陰茎を咥え込んだまま
激しい往復運動をし始める。

唾液に覆われた舌と内部を動き回るミミズは複雑なリズムで
私の陰茎を刺激し、かつてないほどの快楽を生み出した。





そうして私は絶頂を迎えた。

だがペットが満足している
ようには見えない。

解放の条件を満たすまで
私の体は耐えられるのだろうか。